

「オオミツバマツ」の発見

楡 井 尊

化石の世界では、恐竜や大型哺乳類化石（ゾウなど）は花形で、自然系の博物館の展示の目玉になっていることが多いものです。それらと比較すると、植物化石は比較的地味な取り扱いであることが多く、新聞雑誌で取り上げられることもあまりありません。

今回紹介する「オオミツバマツ」は、地味な植物化石の中でも、比較的良好に知られている植物化石です。名前のおお「大きな」マツボックリをつける三葉のマツで、現在、よく似ている種類の三葉マツは、北アメリカに分布しますが、日本には現在は分布しません。

オオミツバマツは、今までに上部中新統から鮮新統（約1千万年前～3百万年前）の東海地方の瀬戸陶土層（瀬戸物の原料になる粘土の地層）から多産するものの、他の地域の同じ時代からは、断片的な産出報告しかなく、完全な球果化石は、今まで関東地方では知られていませんでした（図1）。

オオミツバマツ化石の産出地点



図1 オオミツバマツ化石の産地。この報告も含む。ただし九州の記録は曖昧さが残る。

ところが今回、深谷市の平方付近の荒川河床に露出している楊井（やぎい）層から、完全な形の球果化石が秋山高宏氏（現上里町教育委員会）により発見されました（図2）。

オオミツバマツの球果化石は、大きいものでは、長さ14cmに達する見事なもので、球果鱗片にフック状の臍（へそ）が飛び出ていることが外見上の大きな特徴です。植物化石として

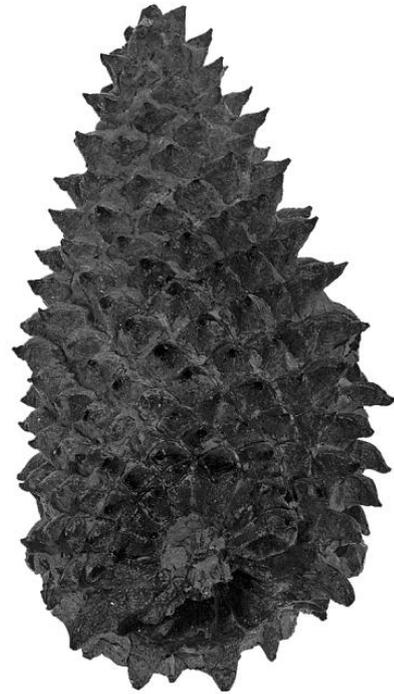


図2 オオミツバマツ球果化石 長さ14cm

は見栄えがすることと、命名者がメタセコイアと同じ三木茂博士であることなどから、多くの自然史系博物館の常設展示に展示されています。

当館でも是非欲しいと考えて、東海地方の植物化石を研究している西日本の学芸員に産地を紹介してもらおうとしていました。それというのも西南日本内帯の堆積物からしか産出しないという先入観があったからです。ところが、まさにその化石が自然の博物館からも遠くない荒川の河床から、発見されたので驚きました。

秋山さんの採集した標本は、まだクリーニングが充分でなく、球果鱗片の間に泥岩が詰まっていたのですが、もとより狙っていた化石だったので、一目でオオミツバマツとわかりました。この球果化石は学会発表を経て、当館の研究報告で正式に産出の記載が行われました。

この発見により、関東でもオオミツバマツが瀬戸陶土層と同じ時代に産出することが明らかになり、埼玉の自然の歴史に新たなページを加えることができたのです。

（にれい たかし・学芸主幹）